「大槻」と「飛鳥」

辰巳　和弘

第一章　聖樹と王宮（飛鳥以前）

平城遷都まで、ヤマト王権は奈良盆地東南部に歴代の王宮を構え続けた。仁徳・反正朝や、天智朝など、河内や近江といった大和以外の地に宮を営むことはあっても、次の王権は再び奈良盆地東南部に王宮を構えることとなる。その背景には該地域が大王家の産土の地として、王宮が本来あるべき地と認識されていたことがうかがえる。

大王の即位ごとに王宮もまた更新されたことは衆知の事象である。記紀等に記録される歴代の宮号を整理すると、王宮の営まれた地域が盆地東南部という限られた版図の内を移動していることがわかる。しかも纒向・磐余・飛鳥のように数代にわたり継続して宮が営まれる地域がある一方、軽・石上・長谷のように一～二代という地域もある（次頁の表参照）。

わたしが注目したいのはそれら王宮の地の多くで、槻（ケヤキ）を王宮の象徴とする伝承が指摘される点である。記紀や『万葉集』を中心に、槻と王宮に関する伝承を整理しておこう。

①　纒向

纒向は崇神・垂仁・景行三代が宮を置いたヤマト王権成立の地である。

その景行朝の宮である纒向日代宮では、新嘗を実修する祭儀用建物のかたわらに大きく枝を張った槻（百枝槻）が聳えていて、その諸手を大きく天上にあげるかのごとき扇形の樹相にかさねるように、大王による天下支配を象徴的に謳いあげる歌謡（天語歌）が『古事記』雄略段にみえる。

纒向の　日代の宮は　朝日の　日照る宮　夕日の　日がける宮　竹の根の　根垂る宮　木の根の　根蔓ふ宮　八百土よし　い築きの宮　真木さく　檜の御門　新嘗屋に　生ひ立てる　百足る　槻が枝は
上つ枝は　阿米（天）を覆へり　中つ枝は　阿豆麻（あ端）を覆へり　下枝は　比那(夷)を覆へり
上つ枝の　枝の末葉は　中つ枝に　落ち触らばへ　中つ枝の　枝の末葉は　下枝に　落ち触らばへ
下枝の　枝の末葉は　あり衣の　三重の子が　指挙せる　瑞玉盞に　浮きし脂　落ちなづさひ　水こをろこをろに　是しも　あやに恐し　高光る　日の御子　事の　語言も　是をば

王権の在所にふさわしい日代宮にそびえる百枝槻。その幹は「内つ国」であり、伸び上がる多数の梢の先端が形成する半球形の面を「日の御子」によって支配されるべき領域を覆う「天（天蓋）」に、その梢が大地に落とす影の平面的なひろがりを「夷」に、天蓋の下におさまる空間領域を「あ端」なる世界にみたてるという、樹相をみごとに象徴的・構造的にとらえた歌謡ではないか。

「日の御子」たる大王が初穂を供え祭り、神と共食するという、統治者としてもっとも象徴的な王権祭儀である新嘗が実修される場（新嘗屋）。そこにそびえ立つ槻の枝は、天から地の果てまで、あらゆる空間を覆うと考えられた。それは世界の中心に立つ聖樹、すなわち世界樹（宇宙樹）であった。盃に舞落ちる聖なる槻の葉の動きこそ天命の発動にほかならない。さらに「水こをろこをろ」というイザナキ・イザナミ二神による国生みを象徴する呪詞を重ね連ねることによって、大八島創成の始原にさかのぼって、大王による天下統治（治天下）の正統性が歌われる。そこに「あやに恐し　高光る日の御子」という大王を讃える詞章が生命をもつ。

代	天皇	『古事記』	『日本書紀』
1	神武	畝火白檮原宮	橿原宮
2	綏靖	葛城高岡宮	葛城高丘宮
3	安寧	片塩浮穴宮	片塩浮穴宮
4	懿徳	軽境岡宮	軽曲峡宮
5	孝昭	葛城掖上宮	掖上池心宮
6	孝安	葛城室秋津嶋宮	室秋津嶋宮
7	孝霊	黒田廬戸宮	黒田廬戸宮
8	孝元	軽堺原宮	軽境原宮
9	開化	春日伊邪河宮	春日率川宮
10	崇神	師木水垣宮	磯城瑞籬宮
11	垂仁	師木玉垣宮	纏向珠城宮
12	景行	纏向日代宮	纏向日代宮
13	成務	志賀高穴穂宮	
14	仲哀	穴門豊浦宮	穴門豊浦宮
	神功	筑紫訶志比宮	橿日宮
15	応神	軽嶋明宮	磐余若桜宮（稚桜宮）
16	仁徳	難波高津宮	難波大隅宮　明宮
17	履中	伊波礼若桜宮	難波高津宮
18	反正	多治比柴垣宮	磐余稚桜宮
19	允恭	遠飛鳥宮	丹比柴籬宮
20	安康	石上穴穂宮	石上穴穂宮
21	雄略	長谷朝倉宮	泊瀬朝倉宮

代	天皇	『古事記』	『日本書紀』
22	清寧	伊波礼甕栗宮	磐余甕栗宮
23	顕宗	近飛鳥宮	近飛鳥八釣宮
24	仁賢	石上広高宮	石上広高宮
25	武烈	長谷列木宮	泊瀬列城宮
26	継体	伊波礼玉穂宮	磐余玉穂宮　樟葉宮 筒城宮　弟国宮
27	安閑	勾金箸宮	勾金橋宮
28	宣化	檜垣廬入野宮	檜隈廬入野宮
29	欽明	師木嶋大宮	磯城嶋金刺宮
30	敏達	他田宮	百済大井宮
31	用明	池辺宮	訳語田幸玉宮
32	崇峻	倉椅柴垣宮	磐余池辺双槻宮
33	推古	小治田宮	倉梯宮
34	舒明		豊浦宮　小墾田宮 飛鳥岡本宮　田中宮 百済大宮
35	皇極		小墾田宮　飛鳥板蓋宮
36	孝徳		難波長柄豊碕宮
37	斉明		飛鳥板蓋宮　飛鳥川原宮 後飛鳥岡本宮
38	天智		近江宮
39	天武		飛鳥浄御原宮
40	持統		飛鳥浄御原宮　藤原宮

歴代王宮の名称

するとくだんの歌が纏向日代宮の宮讃めの詞章で歌い起こされるもうひとつの理由があきらかになる。宮号「日代宮」にみえる「代」が、「苗代」や「田代」、さらには「開木代（山代）」のように、一定の領域をさす言葉であることに留意すれば、「日代」が「日の領域」意味することに間違いはなく、その宮殿こそが「高光る　日の御子」の坐処にまことにふさわしいものとなる。わたしには「日

代宮」という宮号が、汎く大王の宮殿を讃えた呼称だったのではないかと思える。槻の樹相は容易に天球と、そこを運行する日（太陽）を観想させたのだろう。

纒向の地に聳える聖樹、槻といえば「痛足川川波立ちぬ巻目の由槻が嶽に雲居立てるらし」（巻第七・一〇八七）の人麻呂歌が連想される。「由槻が嶽」は、つづく一〇八八番歌に「弓月が嶽」とみえる。「ユツキ」は「斎槻」にほかならず、神の依代として祭られる聖なる槻のこと。槻の聖樹がそびえる山というういいと思われる。由槻が嶽は纒向川（痛足川）の谷筋をなかに、南に三輪山と対面し、中腹に穴師神社が鎮座する海抜四〇九メートルの山嶺に比定されている。西麓一帯にはヤマト王権発祥の地と目される纒向遺跡が展開するが、近年の桜井市教育委員会による調査は、ほぼ東西方向に中心軸をもって並ぶ三世紀前半期に営まれた三～四棟の掘立柱建物跡を発掘。なかに床面積二四〇平方メートルに復元される当時の列島最大の大型建物が含まれ、初期ヤマト王権の祭政空間とみられている。その建物群を貫く軸線が由槻嶽の山頂付近を基点するとみられる事実は重要である。それは王権誕生の当初から槻が聖樹とみなされていたことをうかがわせている。

② 長谷

上述した纒向日代宮を讃える天語歌は、雄略朝の長谷朝倉宮（泊瀬朝倉宮）での新嘗の祭儀のおりに三重采女が歌ったとされる。雄略記は事の次第を次のように語る。

「雄略大王が長谷朝倉宮の百枝槻の樹下で豊楽の宴を催した際、伊勢国の三重郡から遣わされて使えていた采女が、大王にささげた酒盃に一枚の百枝槻の葉が舞ちてしまった。采女は槻の葉が盃に浮かんでいるのを知らず、酒盃を大王に薦めたところ、大王はその落ち葉を見て、采女を打ち伏せ、刀を頸に当てて斬ろうとしたその時、采女は『我が身を殺されますな。申し上げることがございます』と言い、①に引いた天語歌を謡い、その瑞祥に免じて罪が許されたという」。

神に初穂を供えて祭る新嘗の儀につづく饗宴が「とよのあかり」。祭儀の名に豊かな稔りを祝福する古代人の心意がうかがえる。その佳節の宴の場が長谷朝倉宮の祭儀空間であることはまちがいない。百枝槻が聳える王権祭儀の空間に雄略大王の座が設けられたのである。それは纒向日代宮の祭儀空間と同じ設定であり、そこに①にみた天語歌が纒向での王権創業の始原に重ねて雄略朝を位置付けようとする物語りの構成がみてとれる。

人麻呂歌集に「長谷の斎槻が下にわが隠せる妻　茜さし照れる月夜に人見てむかも」（巻第十一・二三五三）がみえる。わたしは七世紀の長谷にあった斎槻が、その昔、朝倉宮の祭儀空間にそびえ立っていた百枝槻である蓋然性が高いと考える。

さて長谷朝倉宮の地をどこに比定できるだろう。近年、橿原考古学研究所や桜井市教育委員会の発掘調査によって、三輪山南麓の初瀬川右岸、桜井市脇本に鎮座する春日神社の南一帯に展開する脇本遺跡がそれと考えられるようになった。しかし現時点までの調査では五世紀後半の掘立柱建物跡が見つかっているものの、遺構の所属する年代の中心は六世紀後半と七世紀後半にあり、いますこし下流域にあたる鳥見山の麓を流下する粟原川と初瀬川にはさまれた扇状地形にひろく展開する城島遺跡までを視野に入れた調査が待たれる。

③ 軽

『古事記』によれば応神天皇は「軽島明宮」に正宮を営んだという。橿原市大軽町一帯がその遺称地とみられる。『日本書紀』は正宮の名を明示しないが、天皇が「明宮」に亡くなったことを本文で記している。また『続日本紀』は応神天皇を「軽嶋豊明宮に馭宇しし天皇」と呼び、「摂津国風土記逸文」も「軽島豊阿伎羅宮に御宇しめしし天皇」とみえるなどの諸点から、軽が王宮の地だったことは確かだろう。軽島明宮とは、「軽にある、嶋を浮かべた苑池を付属させた、素晴らしい宮殿」のい

いであり、欽明朝の磯城嶋金刺宮（師木嶋大宮）という宮号にみえる「嶋」に通じる。

軽島明宮に槻の聖樹がそびえていたとする記録はない。しかし軽の地にそびえる斎槻を詠んだ万葉歌がある。

天飛ぶや軽の社の斎槻幾世まであらむ隠妻そも」（巻第十一・二六五六）

「斎槻樹下の隠妻」という主題は、上述した『万葉集』の同巻二三五三番歌「長谷の弓槻が下にわが隠せる妻‥‥」と同じ。それが朝倉宮にそびえていた聖樹と推察されるのと同様、軽の斎槻もまた、かつての軽島明宮にそびえていた斎槻ではなかったか。

軽を舞台に隠妻の死を悲しむ、二組の挽歌が『万葉集』巻第二にみえる。「柿本朝臣人麻呂、妻の死りし後、泣血哀慟みて作れる歌」という詞書をもつ。いま本論に関係するそれぞれの長歌を提示する。

天飛ぶや　軽の路は　吾妹子が　里にしあれば　ねもころに　見まく欲しけど　止まず行かば　人目を多み　数多く行かば　人知りぬべみ　狭根葛　後も逢はむと　大船の　思ひ憑みて　玉かぎる　磐垣淵の　隠りのみ　恋ひつつあるに　渡る日の　暮れぬるが如　照る月の　雲隠る如　沖つ藻の　靡きし妹は　黄葉の　過ぎて去にきと　玉梓の　使の言へば　梓弓　声に聞きて　言はむ術　為むすべ知らに　声のみを　聞きてあり得ねば　わが恋ふる　千重の一重も　慰もる　情もありやと　吾妹子が　止まず出で見し　軽の市に　わが立ち聞けば　玉襷　畝火の山に　鳴く鳥の　声も聞えず　玉桙の　道行く人も　一人だに　似てし行かねば　すべをなみ　妹が名喚びて　袖ぞ振りつる（巻第二・二〇七）

うつせみと　思ひし時に　たずさへて　わが二人見し　走出の　堤に立てる　槻の木の　こちごちの枝の　春の葉の　茂きが如く　思へりし　妹にはあれど　たのめりし　児らにはあれど　世の中を背きし得ねば　かぎろひの　燃ゆる荒野に　白栲の　天領巾隠り　鳥じもの　朝立ちいまして　入日なす　隠りにしかば　吾妹子が　形見に置ける　みどり児の　乞ひ泣くごとに　取り与ふ　物し無ければ　男じもの　腋はさみ持ち　吾妹子と　二人わが宿し　枕つく　嬬屋の内に　昼はも　うらさび暮し　夜はも　息づき明し　嘆けども　せむすべ知らに　恋ふれども　逢ふ因を無み　大鳥の　羽易の山に　わが恋ふる　妹は座すと　人の言へば　石根さくみて　なづみ来し　吉けくもそなき　うつせみと　思ひし妹が　玉かぎる　ほのかにだにも　見えぬ思へば（巻第二・二一〇）

軽の路は亡き妻の里。市が立ち、往き集う人びとで賑わっている。恋しく思う心がわずかでも慰められるかと、妻がいつも顔を見せていた軽の市の雑踏に立って、愛しい面影を求めたが、聞き慣れた声は聞こえず、ひとりも似た人は通らない。生前、ふたりでみた、門の近くの堤に立っている槻の木の、あちこちの枝に深々と茂る春の葉のように、繁く思いを寄せ、深く頼りにしていた妻だったと歌う。

なお二一〇番歌の異伝歌が「或本の歌に曰く」として後出するが、そこには「うつそみと　思ひし時　携へて　わが二人見し　出で立ちの　百枝槻の木　こちごちに　枝させる如　春の葉の　茂きがごとく　思へりし　妹にはあれど　たのめりし　妹にはあれど‥‥」（巻第二・二一三）とみえ、妻の屋の門口にある堤、そこに茂り立つ百枝槻が歌われる。

「走出の堤」から、門口に近く池の存在が暗示される。軽池とみてよかろう。応神紀十一年条に「冬十月、剣池・軽池・鹿垣池・廐坂池を作る」とみえ、いずれも軽付近に造られた池と考えられる。しかしここは軽池でなければならない。ものいわぬ皇子ホムチワケに言葉をもたらすための船遊びの祭儀が軽池と磐余池で行われたように（垂仁記）、軽池が魂振りの聖処だったという背景が思いあわされる。軽池の傍らこそ、軽の里に住まいした亡き妻を慕う、歌意にふさわしい場だった。後述する履中朝、磐余池での船遊びが宮号の由来にかかわる祭儀であったことを併せ考えると、軽池が軽嶋明宮の苑池であった可能性は高い。

「軽の社の斎槻」（二六五六番歌）と同様、人麻呂の泣血哀慟歌とその異伝歌でも「軽の隠妻」がテーマとされる。軽社の斎槻と軽池の堤に立つ百枝槻は、同じ槻を指すとともに、応神朝の王宮を象徴する聖樹であったと考えたい。古代史上、木梨軽皇子や軽大娘皇女、さらに軽皇子の名をもつ孝徳・文武両天皇の存在は、軽嶋明宮が、七世紀まで伝領されて皇子宮となったと考えられる。

天武十年十月のこと、天皇は広瀬野に観閲式を行おうとし、準備が整えられたものの、行幸はなかった。それでも王族や群卿は軽市に出て飾馬を検閲したさまを書紀は次のように記す。「親王より以下及び群卿、皆軽市に居りて、装束せる鞍馬を検校ふ。小錦より以上の大夫、皆樹の下に列り坐れり。大山位より以下は、皆親ら乗れり。共に大路の随に、南より北に行く」と。

この記事から、軽市を南北に貫く大路のわきに、大夫たちが樹下に座を連ねることができるほどの巨樹が聳立していたことがわかる。それこそ軽の斎槻（百枝槻）であり、樹下に市神の社（軽社）の存在がうかがえる。軽市の槻・海石榴市の椿・阿斗市の桑・餌香市の橘など、それぞれの市にはそこを象徴する聖樹があった。また軽市を南北にのびる大路といえば、奈良盆地を縦貫する下ツ道のこと。しかも天武紀の記載は、軽市の百枝槻の樹下がセレモニーの場であったことを語っている。

軽で執りおこなわれた儀式といえば、推古二十年二月二十日、天皇の母である堅塩媛を欽明天皇の檜隈大陵に改葬するにあたり、軽のチマタ（術）で催された盛大な誄儀礼がある。既に七世紀前葉から、軽市は王権の発揚をかけた祭儀の地で、チマタに形成された市街として殷賑を極めたようだ。樹下に市神を祀る斎槻がそびえ立つ。

④　磐余

槻は磐余でも王宮の聖樹とされた。用明即位前紀に「天皇、即天皇位す。磐余に宮つくる。名けて池辺双槻宮と曰ふ」とみえる。「池辺」とは磐余池の傍らを意味する宮号とみてよく、そこに立つ「双槻」が王宮を象徴する聖樹であったことを語っている。「双樹」を並び立つ二本の槻とみる説もあるが、わたしは二股になった幹から大きく枝葉を天空にひろげる槻の樹相を観想する。既に詳述した纒向・長谷・軽の諸宮の祭儀場に立つ、世界樹、百枝槻にまつわる伝承を思い出していただきたい。池の傍らにある聖樹、槻がそびえる王宮。軽嶋明宮と同じ風景がそこにある。

履中紀三年十一月条は、磐余稚桜宮の宮号の由来譚を伝える。磐余市磯池での船遊びのおり、天皇の盞に散り落ちた桜花のひとひら。この時節はずれの花の探索を命じられた物部長胆連は、掖上の室山に桜樹を見いだし、その花を献上した。その奇瑞が宮号のいわれという。この由来譚は、磐余市磯池に近接して王宮が営まれた情景を彷彿させる。またこの書紀の記事が、磐余遷宮記事（前年十月）、磐余池造営記事（前年十一月）につづけて語られる点から、磐余池は磐余市磯池とも呼ばれたと理解できる。双槻宮はかつての稚桜宮と同所か近接した地に比定されそうだ。

五～六世紀、磐余は幾度も王宮の地となった。記紀にみえる、神功・履中・清寧・継体・用明の諸朝がそれ。さらに書紀の別伝には顕宗朝の王宮も、清寧と同じ磐余の甕栗に宮を置いたという。また敏達朝の宮が置かれた訳語田（他田）の地は、『日本霊異記』や『扶桑略記』などに磐余訳語田宮と

みえ、磐余のうちであったことは確かである。詳説は省くが、舒明朝、西国の民を用いて百済川の側に造らせた大宮の地（百済）も、訳語田と磐余池比定地の中間地域にあたり、やはり磐余の地域とみなせよう。

磐余池が軽池とともに、魂振りの船遊びを実修する祭儀の場であったことは上述した。朱鳥元年十月のこと、大津皇子は天武天皇崩御後、謀反のかどで捕らえられ、訳語田の舎において死を命ぜられる。七世紀後葉の磐余にもいまだ王族の宮宅が存在したことがうかがわれる。しかも大津皇子の辞世歌「ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」（巻第三・四一六）の詞書きが「大津皇子の被死らしめらえし時に、磐余の池の般にして涕を流して作りませる御歌」とある点において、いまだ磐余池が魂振りの地と認識されていたことが明らかである。双槻の葉が散り急いでいたことだろう。

第二章　飛鳥寺の西の槻

推古天皇が小墾田に正宮を営んで以降、舒明・皇極・斉明・天武・持統と、難波（孝徳朝）や近江（天智朝）への一時的な遷宮があるものの、ほぼ七世紀を通して飛鳥が王宮の地となった。飛鳥の槻といえば書紀にたびたび登場する「飛鳥寺の西の槻」がある。

いま「飛鳥寺の西の槻」に関する記事の概要を年代順に羅列してみる。

A．【皇極三年正月】蘇我入鹿の専横に痛憤する中臣鎌足は、企てをともにする王族を求め、やがて中大兄に心を寄せるようになり、「法興寺（飛鳥寺）の槻の樹下」での打毬(けまり)に加わることができた。そして中大兄の皮鞋(くつ)が打った毬とともに脱げ落ちたのを拾い、皇子に奉ったことからふたりの交わりが始まった。いわゆる乙巳の変(六四五年)の序章で、同じ説話は『家伝』にもみえる。

B．【天武元年六月】壬申の乱のおり、倭京の留守司高坂王と穂積臣百足らは「飛鳥寺の西の槻の下」に軍営を設けた。しかし百足は大海人方の大伴吹負により樹下に斬殺され、倭京は大海人側が占拠するところとなる。

C．【天武六年二月】多禰嶋人らを「飛鳥寺の西の槻の下」で饗応した。

D．【天武九年七月】「飛鳥寺の西の槻」の枝がひとりでに折れ落ちた。

E．【持統二年十二月】蝦夷の男女二一三人を「飛鳥寺の西の槻の下」で饗応し、冠位を授け、それぞれ物を賜った。

F．【持統九年五月】大隅の隼人を饗応した。その八日後に隼人の相撲を「西の槻の下」で観た。

Aには「法興寺の槻の樹下」とあるが、そのほかの記事から「飛鳥寺の西の槻」を念頭にしていることは間違いない。またFでは「飛鳥寺」が見えないが、後述するように夷狄饗応の場としての「西の槻の下」といえばくだんの槻の樹下であることも間違いない。

さらに書紀には「槻の下」との記載はないものの、次の夷狄饗応に関する二記載もほぼ同じ地とみてよい。

G．【天武十年九月】　多禰嶋の人らを「飛鳥寺の西の河辺」で饗応し、種々の楽を奏した。

H．【天武十一年七月】　隼人らを「明日香寺の西」で饗応し、種々の楽を発し、物を賜った。道

俗（出家者と俗人）がことごとくこれを見た。

Ａ～Ｈの記事を概観すると、大半の記事が天武・持統朝であるなか、Ａのみが三〇年近く遡る皇極朝の記事である点、またいわゆる乙巳の変への伏線として配当されたとみられる点で、Ｂ以下の記事とは明らかに質を異とする。

はやく山田英雄は、『三国史記』（新羅本紀文武王）や『三国遺事』（太宗春秋）にも蹴鞠を契機に英主と補佐をする臣が出会うという同趣の説話が見える点から、当該の書紀の記載には説話的要素が濃く「事実として甚だ疑うべきであらう」と、その信憑性に疑問を提示した（山田、一九五三）。従うべき指摘である。

そもそも飛鳥寺（法興寺）は、崇峻紀元年、蘇我馬子が飛鳥衣縫造祖樹葉の家を壊ち造営した、蘇我氏の氏寺である。「樹葉」という衣縫造の祖名に、その一族が槻を神木として崇め祭っていたことが想像される。「真神原」という名付けも、それを裏付ける。しかしあくまでも、飛鳥寺誕生以前からの、衣縫造氏にとっての神木が飛鳥寺に随伴する聖樹としてひきつがれたにすぎず、飛鳥の王宮にとっての格別な神聖性が意識されてはいなかった点に留意しなければ、当該の槻の本質を見誤る。

それはＤの記事が、前後して書紀にみえる夷狄饗応記事となんの脈絡もみいだせず、むしろその二〇日後の飛鳥寺の弘聡僧の死の予兆記事と理解される点からもうなずける。しかもＧ・Ｈの饗応記事が「飛鳥（明日香）寺の西（の河辺）」と、「槻」を明示しないのも、「飛鳥寺の西の槻の下」という表現が、広大な飛鳥寺の西一帯のなかでの饗応の場を具体的に指し示したにすぎないことをうかがわせる。またＧの「飛鳥寺の西の河辺」を「飛鳥寺の西の槻」と同じ地点だとすれば、槻は飛鳥川に近い地点に立っていたことになる。

飛鳥寺の西門の西側一帯には、甘樫丘の麓を北流する飛鳥川との間に、南北約二〇〇メートル、東西約一二〇メートルにわたる七世紀中葉以降に付設された石敷き広場（飛鳥寺西方遺跡）の存在することが奈良文化財研究所や明日香村教育委員会などによる発掘調査で明らかとなっているが、槻の痕跡はいまだ見つかっていない。

さて天武・持統朝に夷狄饗応の場だった飛鳥寺の西方一帯ではあるが、壬申の乱と近江宮の時期を隔てて遡る斉明朝でも同じ性格をもつ儀礼空間として書紀にみえる。

Ｉ．【斉明三年七月】　須弥山の像を「飛鳥寺の西」に作った。また盂蘭盆会を行った。日暮れには、海見嶋をへて筑紫に漂着した覩貨邏人、男女六人を饗応した。

Ｊ．【斉明五年三月】　「甘檮丘の東の川上」に須弥山を造り、陸奥と越の蝦夷を饗応した。

そこには該時代にそびえていたはずの槻の姿はなく、須弥山（の像）が造られたとある。Ｊの記事にみる「甘檮丘の東の川上」は、Ｇの記事にある「飛鳥寺の西の河辺」と同じ地点とみられる。しかしそこにそびえていた槻には触れず、須弥山を造り、蝦夷を饗応したという。仏教的宇宙観では、須弥山は四周を大海に囲まれて世界の中心にそびえる高山で、日月星辰はそのまわりを回転し、昼夜・季節の変化が生じるとされる。それは日代宮の百枝槻に通じる仕掛けだった。Ｉの記事で盂蘭盆会が須弥山の像のある場で行われたのもうなずける。

なお斉明紀六年五月条には、「石上池の辺に廟塔(寺院の塔)のごとき高さの須弥山を作り、粛慎四七人を饗応した」と、須弥山の造作とその下での夷狄饗応が語られるが、そこを飛鳥寺の西方に比定する根拠がなく、むしろ飛鳥寺の西北に位置する石神遺跡をその地とする見解が定説となっている。

須弥山は行事のたびに移し構えられたのだろう。

かように飛鳥寺の西の槻をめぐる書紀の記事（A～H）を整理すると、夷狄饗応の記事に偏重するとともに、斉明朝に槻はまったくその存在を意識された形跡がなく、槻がその場に必須の存在ではなかったことに気づかされる。飛鳥寺西方に展開する石敷き広場の風景のなか、飛鳥寺に付随する聖樹として、飛鳥川に近く聳立していたのであろう。やがて天武朝になり、かつて斉明朝に夷狄饗応の場ともなって須弥山が構えられた飛鳥寺の西に立つ槻の聖性が再認識され、再び夷狄饗応の場として固定化されたのではなかったか。その背景には、天武二年に川原寺で開始された一切経の写経事業が完成し、天武六年八月に飛鳥寺でその法会が行われる事例にみるように、壬申の乱後の飛鳥還都を経て、王権による飛鳥寺の庇護がすすんだことがあげられる。さらに天武九年四月に至り、大官大寺・川原寺などと並び、飛鳥寺に官司による管理・援助される「大寺」としての寺格が改めて認められる勅が下されたという経過を無視するべきではなかろう（三舟、二〇一三）。

第三章　天宮の両槻

さて飛鳥には、もうひとつ斎槻に関する記述が書紀にみえる。斉明紀二年是歳条にみえる田身嶺に石垣を巡らせ、嶺の上に立つ二股の幹をもつ斎槻のかたわらにタカドノ（観）を建て、宮号を両槻宮、または天宮と呼んだという記事である。書紀はさらに続けて、香山の西に運河を開削し、舟二〇〇隻を以て石上山の石を輸送して、宮（後飛鳥岡本宮）の東の山に石垣を巡らせたという。後段は田身嶺に巡らせた石垣に関する重出記事とみられる。

両槻宮という宮号に、槻が宮殿を象徴する聖樹（斎槻）であったことが示される。くわえて天宮というまたの名に、纏向日代宮の祭儀空間に天を覆ってそびえ立つ百枝槻が想起され、さらには宮の東の山上そびえる槻の風景に、纏向の由槻嶽（斎槻嶽）がかさなる。なお『続日本紀』大宝二年三月十七日条には「大倭国をして二槻離宮を繕治はしむ」とみえ、両槻宮が半世紀にわたり維持されたことがうかがわれる。

さて、その頂きに両槻宮（天宮）を起こしたという「田身嶺」について、現在の多武峰にあたるとするのが定説である。しかし門脇禎二はこれに異議をとなえ、書紀が「田身嶺」に「田身は山の名なり。此をば大務と云ふ」と分註することから、それを「『田身の山』の一つの嶺」と解釈する（門脇、二〇〇五）。そしてタム（田身・大務）を「曲がる」「曲げる」という意の動詞に由来する地名とみて、「田身の山」を「飛鳥の東から南へめぐり曲って限っていた山並み」を呼ぶものと解釈し、そのひとつの嶺に両槻宮が起こされ、そこに石垣をめぐらせたとし、酒船石を乗せた、いわゆる酒舟丘陵を両槻宮と考えた。わたしも門脇説に従いたい。

飛鳥宮にとっての斎槻は、飛鳥正宮のすぐ東の丘陵で、酒船石はそこでの祭儀（わたしは「天つ水」の祭儀場と考える）のための仕掛けだったと推察される。

第四章　樹下の誓盟の場＝「大槻」が聳立する地

乙巳の変での蘇我本宗家滅亡から六日後、孝徳天皇は「大槻の樹の下」に群臣を召し集め、天皇政治への忠誠を天神地祇に誓盟させた。わたしは、そこに「大槻」が聳立する具体的な地点が記述されない事実に疑問を提示してきた（辰巳、二〇〇九）。先行研究の多くは、これを「飛鳥寺の西」とみて疑わない。今泉隆雄は、乙巳の変のクーデターは板蓋宮や飛鳥寺周辺の飛鳥を舞台にして行われた

から、この「大槻」を「飛鳥寺の西の槻」としてまちがいないとする（今泉、一九九三）。しかし「飛鳥寺の西の槻」を「大槻」とした記録はなく、さらに化外の民に対する王権の象徴としての「飛鳥寺の西の槻」の登場が天武六年（C）までない事実、なにより天武朝を遡る斉明朝では、飛鳥寺の西から飛鳥川の辺での夷狄饗応の場の象徴が須弥山という宗教的構造物であったことは、飛鳥寺の西の槻樹の下が天皇の国土支配を神々に祈念するという高次の場と認識されていなかったことを物語る。すなわち誓盟の場となった「大槻」は「飛鳥寺の西の槻」ではなかった。纏向・軽・長谷・磐余など大和の各地に槻がそびえ立つなかで、樹下に天地の神々に誓盟する「大槻」とは、ただ槻の巨樹性をいうだけではなく、ひときわその尊貴性が高かったことに由来するとみるべきだろう。

書紀には「大槻」の語が、もう一カ所にみえる。大化五年三月、謀反の嫌疑をうけ、難波から飛鳥の北東にあたる山田の自邸へ逃走する蘇我倉山田石川麻呂を、長子の興子が「今来の大槻」のもとに迎えたという記述である。「今来」は高市郡一帯（橿原市・明日香村・高取町）を指す地名。軽市から山田道を東へ、自邸に急ぐ石川麻呂が「飛鳥寺の西の槻」の下に立ち寄って興子と落ち合う余裕はない。難波から山田へのルート上にあって、山田から近い地点に聳える槻といえば、第一章③で詳述した軽市の百枝槻・斎槻であった可能性が極めて高い。

軽市はまた、山田道に雷を追う小子部栖軽の説話に「軽諸越衢」と見える。「諸越」という名に、「さまざまな世界と繋がる場」という意が内包されており、推古二十年の誄儀礼とも関連し、境界としてのチマタがもつ属性の深さを覗かせてくれる。そこに立つ斎槻もまた宇宙樹と観念されたことであろう。軽の地は、まさに四通八達の地と認識されていた。そこにそびえ立つ百枝槻・斎槻の樹下こそ、天地の神々に誓盟をたてる場にふさわしい。「大槻の樹の下」とは、軽市に聳立する百枝槻の樹下をおいてほかにない。孝徳即位前紀と大化五年三月条にみえる「大槻」は、軽市に聳立した斎槻をいう。

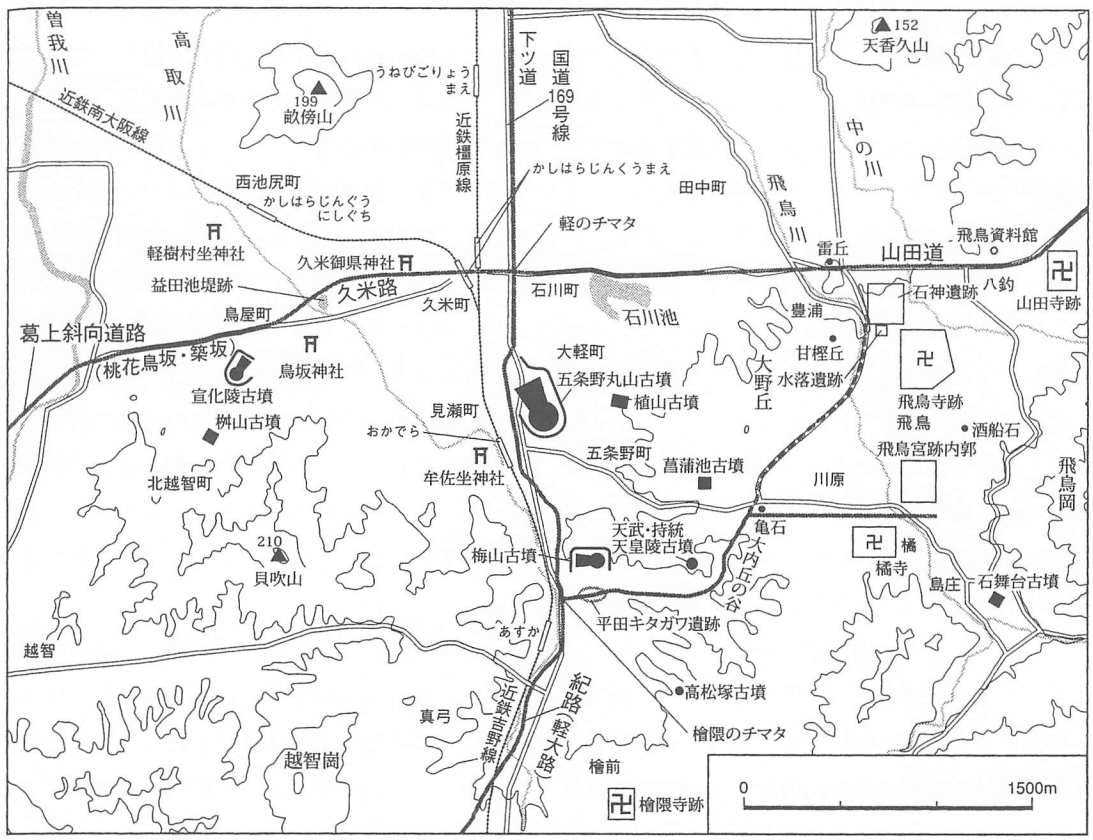
この樹下の誓盟のおこなわれた地点に触れた近年の研究書の多くが、それが「飛鳥寺の西」にあるとする。なかには史料にみえない「飛鳥寺西の大槻」という言葉を幾度も使用して論を進め、あたかも書紀に当該のくだりがみえるかのような錯覚さえあたえかねない研究すらみえる（三宅、二〇一三）。

「法興寺（飛鳥寺）の槻の樹下での打毬」の伝承が史実ではないとする山田英雄の指摘（山田、一九五三）にいま再びたちかえるべきであろう。

第五章　「あすか」地名を考える

天武一〇年一〇月に行われた軽市での飾馬検校のセレモニーでは、飾馬の列は大路を南から北へ行進した。大路とは下ツ道のこと。奈良盆地を正南北に縦断すること約二三キロ、路面幅約一八メートル、東西に七～八メートル幅の側溝をもつ大路に復元される。下ツ道の東に、それぞれ約二・一キロ（高麗尺の六〇〇〇尺）の間隔をもって、中ツ道と上ツ道が建設される。かつて私は、これら三道が六世紀後葉に建設された可能性が高く、さらにその基準が下ツ道にあることを論じるとともに、下ツ道設定の基準が五条野丸山古墳にあるとする既説が成立せず、「今来の大槻」こそがそれにあたることを詳説した。下ツ道はやがて平城京の造営にあたり、その中心軸（朱雀大路）となることはよく知られる。平城宮大極殿（第一次）の南（影面）の彼方に今来の大槻が聳え立つ構図がある。

はやく大和における直線古道の存在を指摘し、研究を主導した岸俊男は、下ツ道が軽のチマタ（国道一六九号線丈六交差点）から南へ約四〇〇メートル付近までまっすぐ南進したところに、古墳時代



今来・飛鳥地域関連地図

後期最大の壺形墳（前方後円墳）、五条野丸山古墳（全長約三一〇メートル）が立ちはだかり、下ツ道はそれを避けるように丸山古墳の突出部（前方部）の隅角を回り込んだ後、高取川沿いに地形なりに南下する紀路となることから、下ツ道は同古墳が築かれた六世紀後葉以降に敷設されたと考えた。そして丸山古墳の中軸線と周濠外縁、あるいは周庭帯との交点を起点としてそこから北の直進する下ツ道が計画されたと提起した（岸、一九八八）。以後の研究はことごとくこの岸説を検討することなく定説として採用してきた。しかし丸山古墳の北側には、周濠や周庭帯が建設された形跡がないことは考古学研究者なら容易にわかるはず。わたしは岸説が成立しないことを論じた（辰巳、二〇〇九）。それでは下ツ道の起点は何か。わたしは今来の大槻だったと考える。それは丈六交差点（軽のチマタ）から真東に山田道が敷設されたこととも密接な関連をもつ。まさに今来の大槻は古代奈良盆地のランドマークだった。

一方、軽市から真東に延びて飛鳥に至る計画的直線道の山田道は、石神遺跡第一九次調査で七世紀中葉に建設されたことが明かとなっている。ただ記紀には五世紀に遡る軽と磐余を結ぶ道の存在をうかがわせる記述が散見されるから原山田道ともいう道路が並行して想定される。軽から飛鳥まで延びる東西道、それは「大槻」から東へ延びる。飛鳥は「大槻」の東にある地。

「あすか」地名の原義については、「飛鳥」や「明日香」の用字を含めさまざまな解釈と意義づけがなされてきたなかで、「あ」を美称的接頭語、「すか」を「洲処（すが）」、すなわち砂礫湿地帯を言うとする説がおおかたの支持をえてきた。王権にとっての「大槻」の象徴性を追究する私は、「大槻」の梢＝天球を運行する太陽（日）が出る方角や所という意味の、「あす（あした・あさ）」＋「か（処）」がそれではないかと考える。

ヤマト王権発祥の地に比定される纒向遺跡で発掘された、三世紀前半とみられる三～四棟の掘立柱建物跡が東西方向に軸線を同じくして並ぶという事実は、ヤマト王権が太陽の運行を意識したコスモロジーをもつ王権だったと考えさせる。さらに雄略記に見える天語歌で、百枝槻が聳える景行天皇の王宮を纒向の日代宮とする名付けに「太陽の宮殿」というイメージが重なる点も重要である。

それは大王を「高光る日の御子」（天語歌）とする称揚句を裏打ちし、『万葉集』に散見される「高照らす日の御子」・「高光る日の皇子」と呼ぶことに繋がるとともに、王宮を「日の御門」と讃えることになる。

さらに纒向遺跡の建物群を貫く軸線を東の青垣に延長したところに斎槻岳がある点も無視できない。おそらく斎槻岳に聳立する槻と、天語歌にみえる王宮の中心にある新嘗屋の脇に聳え立つ槻を結んだ線こそが、纒向王宮の軸線だったと思われるのである。

日が昇る方の山上に聳える槻といえば、斉明朝の「宮の東の山」に営まれた両槻宮を天宮とも呼んだとする書紀のくだりは重要である。ヤマト王権の始原（纒向遺跡）に聳立する斎槻の象徴性は、その後の長谷・磐余、そして飛鳥京にまで継承された。

【註】

今泉　隆雄　一九九三　「飛鳥の須彌山と斎槻」『古代宮都の研究』吉川弘文館。
門脇　禎二　二〇〇五　「『田身嶺』について」『飛鳥文化財論攷』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。
岸　俊男　一九八八　「大和の古道」『日本古代宮都の研究』岩波書店。
辰巳　和弘　二〇〇九　『聖樹と古代大和の王宮』中央公論新社。
三舟　隆之　二〇一三　「『大寺制』再考」『日本古代の王権と寺院』名著刊行会。
三宅　和朗　二〇一三　「古代の人々の心性と巨樹」『環境の日本史』第二巻、吉川弘文館
山田　英雄　一九五三　「中臣鎌足傳について」『日本歴史』第五八号。